
THE LAST MEMORY ~ 第0使徒風斬レン ~

風斬 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE LAST MEMORY ～第0使徒風斬レン～

【Nコード】

N1570Z

【作者名】

風斬 澪

【あらすじ】

エクソシスト風斬レンは、ノアメモリーが覚醒したため
教団を去る

彼女の運命は如何に！？

第0夜〜別れ〜

あの惨劇から約5年

ドガアンツ！！

何か壊れる音とともにゴーレムから室長、コムイ・リーから通達が入る

通達！通達！ホームの壁が何者かに破壊された模様！

ただちに確認へ向かえ！

「メンドクせ」

そうつぶやいたのは、イノセンス「六幻」をもつエクソシスト神田ユウだ

面倒だ、と言いながらも指令なのでとりあえず音がした部屋へ

向かう

向かった部屋に住んでいるのは、エクソシスト風斬レンだ

神田が着いたときには、時既に遅し、住人風斬レンの姿も、彼女のイノセンス‘炎乱’も無くなっていた

神田はゴーレムの向こうにいるコムイへ言った

「おい、コムイ」

神田くん？

「壁を壊したヤツがわかった」

それは誰だい？

「多分、レンだろうイノセンスも無くなってる　俺はアイツを追っ」

無茶だよ、神田くん　それにどうして彼女が逃げたってわかるのさ

「机の上にメモがあった　げんきでね　ってな、おまけにさよなら　そう書いてある」

…そういうことが、<室長！レンがどこにいるかわかりました！>どこだい！？<崖を降りたトコの森です！>

神田くん！レンちゃんを追って！

「了解、門を開けるコムイ」

急いで！神田くん

「壁、壊してきちゃったけど門から出た方が良かったかな」

ハア、と溜息をつく藍色の髪の少女、彼女の足にはさっきまで傷があつたのだろうか血痕がある

「急がないと、教団の追手がくる」

「オイ」

ふいに背後から聞き覚えのある声に呼び止められた少女は、振り向いて絶句する

「…………げっ！ユウ！？」

彼女を呼び止めたのは神田ユウだ

「レン、お前こんなトコでなにしてる？」

彼女、 レンは、動揺していたがとりあえず一言

「…ユウに話す必要があるの？」

レンがそう言うと神田は自身のイノセンス‘六幻’の切っ先をレンの首にあてた、そして

「なにがあつた？」

と、問うだが、レンは目を伏せ話そうとはしなかった しばらくたつてレンが口を開く

「……………いえない…言えないよ…」

まるで今にも消えてしまいそうなほどか細く、小さな声で言った
よく見ると彼女の頬には涙がつたっている

神田は何かを察したのだろうか、六幻を鞘へおさめた そして、
神田はレンを抱き寄せた

「!?!?…ユウ？」

「…お前が何をしようと俺の知ったことじゃねえ…だから、話さなくていい」

そう言って神田はレンのことを少し強く抱きしめた

「ユウ…ありがとう」

レンはそういうと、普段見せている笑顔で神田に笑いかけた、まるでもう大丈夫だよ、そう言わんばかりの笑顔で

「ああ」

神田は短くそう返すとレンを離す

「それで？レンお前これからどうするつもりだ？」

「えっと…どうしよう、一日早く出てきたから、何にも考えてない…」

「ハア？一日早くでできた？どうしてだ」

「私は、もう教団に戻ることはないだろうからじゃないかな」

『教団に戻ることはない』そう言ったレンの表情には、寂しさと悲しみが混ざっていた

「なあ、レン」

「何？」

「お前明日まで、一人でココにいるつもりか」

「まあ、明日まで向かえは来ない…かな」

「明日まで、明日までお前のそばにいてやる」

「ハイ？今なんと？」

なぜか、そう言い返すレンの目は点になっている

なぜなら、普通の神田が『そばにいてやる』なんて言葉いうハズがないからだ

「いやいやいやユウ！アンタ本部に戻れ！」

「なんでだ？」

「なんでもなにも アンタエクソシストでしょーが！」

心なしか先程のレンと比べると語気が荒くなった気がしないでもない
こんなやり取りがしばらく続き

「とりあえず、落ち着けレン」

神田のその一言でレンはとりあえず落ち着く、そして、核心に迫る

「なんで？わたしは、裏切り者だよ？」

「裏切り者だが、知ったことかよ お前はお前だろ?」

「!…そうだね」

少しの間レンは黙る そして、空を見上げると『もう、夜か』そ
うつぶやくと野原に寝転がる

すると、レンは突然感嘆の声をもらす

「きれい…」

「レン?どうした」

神田は、レンが寝転んでいるのをみると 同じ様に寝転がった

「すげえな」

レンと神田が見たのは、夜空一面に広がる星 一つ一つこそ違
うが夜空に良くはえてとても美しい

「ユウ?」

「なんだよ」

「ありがとう 大好きだよ、ユウ」

「ああ」

「おやすみ…」

「それじゃ、ユウ元気でね　リナちゃんにもよろしく言っといて」

「待て」

歩き出したレンをいきなり呼び止め　何かを投げた

「それ、持っとけ」

あと、
…

神田はレンに耳打ちすると

「わかったな？」

「！！
うん、わかった」

で、これって“約束”？」

「ああ」

この日を境にレンを見たものはいない

とある一族を除いては
…

第0夜〜別れ〜（後書き）

駄文ですがどうぞよろしく

風斬 レンに質問！

質問ルームにて

「それでは早速質問を始めたいと思いまーす」

「何する気よ？駄文作者」

「質問だよ、質問！では第一問！」

「いきなりだな……」

「身長・体重は？」

「164？・41？」

「好きなものは？」

「サラダとか野菜類だよ」

「嫌いなものは？」

「肉系 でも人なら、コムイ、千年公」

「イノセンスは？」

「炎乱という槍型のものだ」

「イノセンスの能力は？」

「秘密だよ、でもほっときゃ出てくるんじゃない」

「メモリーの名前は？」

「知らないね」

「誕生日は？」

「7月10日」

「血液型は？」

「O型」

「年は？」

「現在15じゃね？」

「では、最後に風斬レンさん！皆さんに挨拶お願いします！」

「えっと、これからしばらくの間、よろしく」

「では」

「」「じゃあな」

風斬 レンに質問！（後書き）

そろそろレンのキャラを固めていききたいと思います

第1夜〜目覚め〜

side レン

目を開けた時、見たのは真っ白い天井、名前以外何も分からない
生きる理由も、なんでここにいるのかも、何もかも

「ようやく、目覚めたな風斬レン」

「！誰だよ、アンタ…」

私が問うたのは、褐色の肌に額に良く分からない模様をつけた男

「まあ、そういうのはトーゼンだよな オレの名前は

ティキ・

ミックだ」

「あゝレン起きてる〜ティッキーなんでボクに教えてくれないの
さ〜！」

「教えたぞ、ロードお前が聞いて無かっただけじゃないのか？」

「ティッキーのイケズウ〜」

「おやおや、ようやく目覚めたようデスネ？風斬レン？」

なんだ？こいつは？服は貴族とピエロを混ぜたような格好、達磨

のような体型

感想すら浮かばない

「「ジャステビ登場！」」

「今度は、何なんだよ どの時もこいつも…」

あれ？空気が止まった？私なんか言っただかな…今突然入ってきた二人組もフリーズしてる

「ヒビツ、こいつ結構口悪いね」

二人組の金髪の方がそう言った

なるほど、さっき空気を止めたのは私か…うん？なんか異和感があるな

よく見てみると、さっきのティキとかいう奴とかロードって子に残念な二人組…

あと私、全員もしかして、いや、もしかしなくても肌の色一緒？

私の肌ってこんなに浅黒かったけなあ…

「ま、仲良くしようよお〜レン〜ボクはロードだよお〜」

「なんで、私の名前知ってるの？」

「秘密っ〜」

「デロは、ジャステロ」

「オレはデビットだ」

「二人合わせてジャステビだよ ヒビッ」

「ああさっきの二人組か」

「二人組じゃねえ！ジャステビだ！」

確か、デビットだっけ？ジャステロとかいう奴より五月蠅いな
…黙らせてやるうか

ま、いつか メンドくさいし

ゴトッ

私は、落ちたものをデビットに渡そうとした、その時そよ風が吹
き それに書いてある

文字、それは

“請求書”

「オイ、何か落ちたぞってコレ…請求書？えっと、ナニナニ蛙の
ひずめ亭 13ギニー、

鳥のはらわた亭 45ギニー、e t s 占めて 86ギニー……
うわー何これ」

「ジャステビたま、また借金つけられたレロ〜?」

かぼちゃがついた傘が、なぜかしゃべる　するとジャステロが口を開く

「穴あき傘にされたくないなら黙ってる　ヒヒッ」

なんなんだろ、こいつらの勢力図…

「茶番が続きまシタガ、本題に入りまシヨウ? 風斬レン?

お前は、我輩の仲間になるつもりはアリマスか??」

「…好きにしる、どうせ私に選択権は無い様だからね　でも、」

「でも?なんでシヨウ??」

「記憶が戻ったら、私はアンタらをどうするか　分からないよ?」

そういつて　微笑む彼女はまるで悪魔のようだった

「戻ったら”ご自由ニ?　…戻るハズナイデスケドネ?」

千年公が最後に言った言葉は、レンには聞こえていないようだった

「どうせあなたはノアになったのデスカラ? 我輩の仲間になるホカナイノデスヨ?…風斬レン?」

「ノアとやらが何かはともかく、協力してあげるよ…千年公」

今の‘ノア’としての彼女には、
‘エクソシスト’だった頃の面
影すら残ってはいなかった…

第1夜〜目覚め〜（後書き）

レンがノアになりなしたねー

いや〜無計画にもほどがある

第2夜〜亡霊〜

風斬レン 18歳

「マテール？」

「ハイ？先程‘ブローカー’から情報がありマシテネ？」

「何の情報？千年公、もしかしてイノセンス？」

そう問いたのは、藍色の髪のア、レンだ

レンの質問に答えるのは、少し、いやかなり太っている千年伯爵だ

「その通りデスヨ？レン？ 取りに行つてモラエマスカ？？」

「トーゼン！…で、マテールつてどうやって行くの？」

「ゲートを出しマスカラ、少し待つててください？ お〜いティキぽ〜ん？」

「おい、千年公その呼び方やめてくれよ で、ご用は？」

そう言つて闇から顔を出したのは、ティキだ

そして千年公はティキに何か耳打ちした するとティキがレンを呼ぶ

「レン、ちょっと来いよ」

「あいさー」

テイキに連れられレンが来たのは、膨大な武器が保管されている
部屋だ

部屋を見回すと、銃に剣、弓など様々な武器がある

「確か、コレだっけな」

テイキは、全長140?は軽くあるだろう桐箱をもってきた

すぐさまレンは、テイキに問う

「テイキ、何これ？」

「開ければわかる」

そして、レンは桐箱を開け、その青い瞳には困惑の色が宿る

「おい、テイキ、なんでイノセンスがココにある？」

レンが開いた桐箱の中身は、レンが、エクソシストだった頃の武器
器だった

だが、今の彼女はそれを知らない、いや知るはずがない

重くなった空気を何とかしようとしてイキはとりあえず口を開いた

「これは、お前がノアになる前に使っていた武器だ。名前は知らんが」

ノアになる前なんて、ないだろ、そう言わんばかりの疑いの目

「いいから持っとけて」

そう、強引にレンにイノセンスを渡すと

「さ、あんま千年公を待たしてやんなよ」

「…了解」

「千年公、終わったぞ」

「遅いデスヨ？もうゲートは開いてマス？レン、準備はいいデスカ？？」

さっきの暗い顔は、ドコへやら楽しそうな表情のレンがいた

「あいさ、準備完了だぜ、千年公」

「では、行ってきてクダサイ？マテールへ？」

「行ってきまーす」

ゲートの光の中に彼女の姿は見えなくなった

同時刻

マテールへはアレン・ウォーカー、神田ユウの2名のエクソシストが
向かっていった

第2夜〜亡霊〜（後書き）

そろそろ原作介入します！

土日は、UPできませんので、
あしからず

第3夜〜マテール2〜

「INマテール！」

まるで、長い時間探していたかのような大声をあげるレン

だが、彼女がココに着くまでの所有時間は約2分だ

「…さて、イノセンスはどこかな…？」

そういう彼女の笑みは狂気に満ちていた

同時刻南イタリア マテールの地

「よし 結界に捕えたぞ…！」

「死んでも出すな…！！！」

約3体のアクマが結界装置で捕えられていた

「これで、しばらくは時間が稼げますね隊長」

「……どうかなこの数の結界装置で足りるかどうか」

息も絶え絶え隊長と呼ばれた者が、重い口を開く

「中央の奴の姿を見る…あれはだいぶ人間を殺してやがる」

ドン！

「！！！」

隊長の隣のファインダーがアクマに頭を撃ち抜かれたのだ

（ヒヤヒヤ！ヒヤヒヤヒヤヒヤ！！）

（私はアクマ！！！！）

ボコボコボコと結界が膨張していく

それを見た隊長は、大声を張り上げる

「ヤバイ…退避しろ！ こいつ 進化するぞ！！！！」

するとその場に緊張感が走る

（私はアクマ）

（ダークマターから生まれた新たな自我！！）

（育んでくれて どうもありがとう…）

そして、結界が破られピエロのようなアクマが顔を晒した

「レベルアップだー」

都市にファインダー部隊の絶望の声が響いた

「ねえ、千年公イノセンスってどんな形してんの？」

そうデスネエ？デハこんな話をしまシヨウ？

千年公がした話はこんなものだった

‘古代都市マテール’には、亡霊が出るという

亡霊の正体は、かつてのマテールの住人

町を捨て移住していった仲間達を怨み

その顔は恐ろしく醜やか

孤独を癒すため 町に近づいた子供を引きずり込む

「つまり、何型だよ千年公」

まるで、わかりずれエ、そう言わんばかりの表情だ

おそらく、人型でシヨウ？

ちっ、とレンは舌打ちすると無線を切った

『ファインダーあたりに聞くとするか…』

そして、先程絶叫が聞こえたところへ向かう

「…！」

鼻につく異臭、あたりにあるのは、赤

おそらく全てファインダーのものだろう

体が残っている者がいないわけではない、

残っている者もほとんどが原型を留めていなかったのだ

すると、他の場所からミサイルの轟音が響いてくる

「おっ？イノセンス見つかったのかな？」

ニヤツと笑うと音がしている場所にレンは突っ込んでいった

「どンドン撃ってー」

先程、レベル2となったアクマが指揮をとっているようだ

2のしたから うつつと人間のうめき声とする

「この 人間め」

ぐに、2はファインダーの頭を踏んでいた

「装置ごと人形を結界に閉じ込めるなんて考えたね

こりゃ時間かかりそうだ」

すると死にかけのファインダーは2に向かって息も絶え絶え言った

「イゝイゝノゼンズはお前らアクマになんか渡さない…っ」

2はファインダーの頭をぐつと踏む

「ギャアア」

ブシュ、ファインダーの頭から血が吹き出る

「ヒマ潰しにお前の頭で遊んでやる」

「やめろ！」

白髪のエクソシストが無謀にも2に突っ込んでいった

結界のなかの人形も驚いているようだ

そのとき不意に声がした

「イノセンス発見！…エクソシスト？」

ラッキー、と呟くと

「おい、2そいつ私に譲ってくれない？楽しそうだからさ」

「っ…ノア様、わかりました…」

「お前はイノセンス追えよ？追わなかったらお前

消すよ？」

冷たい冷酷な声でレベル2に言い放つと

白髪のエクソシストに向きなおした

そして、レンは楽しそうに笑うと白髪のエクソシストに告げた

「つぎの相手は私だよ 白髪のエクソシストくん」

第3夜「マテール」(後書き)

今回はVSアレン君です

相変わらずの駄文お許しください

第4夜〜マテール3〜

「次の相手は私だよ 白髪のエクソシストくん」

につこりと笑顔のレン、だが、アレンの顔つきは厳しい

(なんで、彼女を見てアクマは脅えた?)

アレンの疑問は当然のものだ、

レンがアクマよりレベルの高い存在ということ

ましてや、ノアと言う存在がいる、その事実すら知らないのだから…

そして、レンは笑顔のままアレンに聞いた

「私の名は、風斬レンだよ あんたの名は？」

疑問を持ちながらもアレンは問いに答える

「僕の名前はアレン・ウォーカーです」

「そっかー覚えとくよ、アレン・ウォーカーでも私と戦って死ななかつたら、ね」

レンは“エクソシスト”だった頃のイノセンス

‘炎乱’を取り出す そして

「イノセンス発動 炎乱」

レンがイノセンスを発動させたことにより、

アレン・ウォーカーの疑問はまた増える

(この人、適合者!? あんなイノセンス教団で見たことがない!)

「なあ、アレン・ウォーカーよそ見してると

死んじゃうよ?」

気付いたら目の前まで来ているレン

「バイバイ 炎乱一陣目炎斬」

「!はやつ」

ドガァン!

「なーんだ、弱いんだね、エクソシストって」

ハア、と退屈そうな溜息を一つ

「僕は、まだ死んでませんよ? レンさん」

肩で息をしているが、傷一つアレンにはない

（危なかった…僕のイノセンスが発動していなかったら

僕はきつと死んでいた…！）

確かにレンのスピードは恐るべき速さだ

あの速さは常人にはない 当然アクマにも

「あんた、アレンだっけ？ 確か、アクマの魂が見える奴…

私ら、あんたの情報少し持ってるんだ

ま、千年公に聞いた程度のもものだけだ」

「そういう貴女はどうなんですか？レンさんあの速さといい、

そのイノセンスといい

貴女のほうこそ何かあるんじゃないんですか」

追及的なアレンにレンは一言だけ言った

「私は、千年公の仲間っていうか味方、ってとこかな？

これ以上は教えられないよ…ありゃ？地震？」

先程からグラグラしていたのだが、

両者共に気付かなかった様だ

「じりゃ、やばいかも…」

「んぞでこよ…」

ビキビキビキ……ゴシヤッ!

「きゃー……!」

二人の声は地下へと消えていった…

第4夜〜マテール3〜（後書き）

しまった…

神田の存在を忘れていた…

どーしよ

第5夜〜マテール4〜

「「ぎゃーー！」「」

ドシヤッ！

静けさをたたえていたマテールの地下道

だが、レンとアレンが落下したことにより、

静けさは一瞬にして、消えうせる

すると、突然ガラガラとガレキが浮き上がった

「痛っっ」

先に起き上ったのはレンのようだ

片手にガレキを持っているのでかなり不自然だ

そして、もうひとつ不自然な所がある それは

落ちてきたときの傷がひとつ残らず回復していること

だが、レンにとっては何もかもがどうでも良いのだ

記憶を取り戻せれば、それで…

ふいに、レンの隣の巨石がこれまた巨大な手が持ち上げる

「…っ…ここは？」

どつちら、アレンは生きていたようだ

体中が痛むのだろう、立ち上がるのもままならないようだ

「立てるか？アレン？」

挑発的にレンが言うと、自力で立ち上がる

「馬鹿にしないでください、レンさん」

「ああ〜ワリイ、ちょっとした癖でさ」

ハハッとレンが楽しそうに笑う、

つられてアレンも笑いそうになるだが、

アレンは、レンが自らの、そして教団の敵であることを

思い出し、そして険しい顔つきになる

レンが表情の変化に気づかないはずがない

一度間合いを取ると

「かかってこいよ、アレン・ウォーカー！」

(長引かせては面倒だね…、ちゃっちゃんと済ますか…)

と、レンは炎乱を構えた

「では、行きますよっ！」

アレンはレンに無謀にも突っ込んでいった

ガギーン！

ギーン！

ズガアン！！！！

激しい戦いの中、レンは余裕の笑みを浮かべている

だが、対するアレンの表情は苦しそうだ

そんな中、アレンはギリギリで攻撃をかわしながら

レンに聞いた

「レンさん！」

「？」

「あなたはッッ！」

ギーン！

レンは、アレンの首筋に、槍の先端を突き付けた

「何さ？私に聞きたいことでも？」

「ええ、僕には不自然に映るんですよ…」

なんで、アクマと人間が一緒に行動するんですか？」

「なにかと思えばそんなことかよ、答えは単純だ

アクマは私らの兵器だから、それが答えよ」

「兵器だって！？何言ってる…」

レンは突き付けた炎乱を強く押し、アレンに告げた

「兵器は人が人を殺すものだ お前のイノセンスも兵器でしょ？」

そう告げたレンの声は、驚くほどに冷徹で殺意がこもっていた

レンが続ける、

「それに、 私には千年公が何しようが関係ない

私の目的に関係があること以外にはね」

「あなたの目的とはなんです？」

ギョッ

2がタイムのしっぽを右手でつかむとぶらぶらんとぶら下げる

「へへへへ！お前も殺す！！えいや！」

ぐしゃっ、2はタイムをチョップで破壊すると

「ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

愉しそうに笑うのだった

その声がマテールの地下通路まで聞こえているとも知らずに

突然2の脳内に自分より格上のノア、レンの音が響く

（おい、お前イノセンスを追わなかったら、消す」と

言ったよね？

さっさと追えよ…役立たずが…）

レンの言葉が終っても2はしばらく硬直していた

だが、レンの「消す」その言葉に威圧されたわけではない

2はレンの存在自体に恐怖しているのだ

レンが、ノアが言ったことは実行しないと消される

2の頭の中はそのことではいっばいだった

だれでも、上の者は恐ろしいだろう？それと同じだ

(ノア様の命令は絶対！果たさなかったら私が消される！

せっかくここまで進化したのに消されるのはごめんだ)

と、思うとイノセンスを追うのに絶好の相手を見つける

(こいつなら、姿を写してもバレない…ヒヤヒヤヒヤ！)

第5夜〜マテール4〜（後書き）

全然進みませんねー

只今原作で2刊目です

第6夜〜マテール5〜

(こいつなら姿を写してもバレないヒヤヒヤヒヤ!)

レベル2が目を着けたのは、

数分後、マテール地下通路

「神田殿」

スツと闇から出てきたのはファインダーのトマ

神田はトマがきたことに気づく

そして少女と老人に向き直ると

「悪いがこちらも引き下がれん あのアクマ達に

お前の心臓を奪われるワケにはいかないんだ

今はいいが最後には必ず心臓をもらっ

巻き込んですまない」

「……………」

どうやら人形の心臓がイノセンスの様だ

トマが神田に粉々になったナニかを差し出す

「ティムキャンピーです」

するとティムは、トマの手の中で少しずつ元の姿に戻っていく

そして完全に自己修復すると、体の半分以上はあるであろう

巨大な口を開くと、レベル2の姿を映していく

これは、ティムの機能だ

神田はその映像を注意深く観察すると、あることに気づく

「鏡のようだ…」

「はい？」

神田は続ける

「逆さまなんだよこのアクマ…」

見てみる、奴がモヤシに化けた時の姿…服とか武器とか…

左右逆になってる」

トマはあることに疑問を持つ

「もやし？」

「あいつのことだ」

あいつとは、アレンのことだ

だが途中からレンが割り込んできたために

これ以上レベル2の情報を持っていない

コンコンコン

「おい、トマ」

「なんででしょうか？」

「今、何か聞こえたか？」

「どのような音ですか？」

「まるで、硬いものを叩いているような音だが

聞こえなかったのか？」

ドガァン！

「「「！！！！？」」」

神田とトマの隣の壁が砕け散った

「あー、やっと出れたー！

…エクソシストと、ファインダー？

ってことは、イノセンスも一緒かな？」

壁から出てきたのはレン、ずいぶん迷い続けていたようで
疲れ切った顔をしている

「さて、イノセンスを渡してもらおうか

エクソシストにファインダー？」

神田は険しい顔でれんに問う

「もやしはどうした？」

もやしが何なのかわからないのだろう

レンの目は点状態だ

「モヤシって誰？」

「お前が相手してた奴だ」

「ああ、アレン・ウォーカーのことか

あいつは今ごろ迷ってるんじゃない？

私は気絶させたただだし、」

「気絶させただと？」

「そうだよ、私はあんたらの敵だし

そうするのが普通でしょ？」

私はあんたらの敵、

レンのその言葉に神田は一瞬動揺したが、

神田には神田の任務がある、

私情を持ち込む訳にもいかないのだ

「おい、お前」

「何よ？」

「お前の名は、風斬レンで間違いないな？」

「確かにそうだけど、なんで私の名前を？」

神田はレンにとって信じられない事実を口にする

「それは、お前が3年前まで

エクソシストだったからだ」

「!???」

第6夜〜マテール5〜(後書き)

次回をご期待ください

アンケート！

この小説を読んでくれている

読者のみなさん！

これから、レンのイラストを掲載するか迷って

いるのですが掲載した方がいいでしょうか

掲載するなら皆さんにアンケートを取ろうと

思った次第です

次の質問にどうか、お答えください！

1、レンの容姿で想像したことは

なんですか？

(目の形や雰囲気など)

2、レンの衣装はどういった物がいいでしょうか

(着物、ブラウスなど)

3、クリスマスは、番外編を書くつもりですが

どういうものがいいでしょうか

（ノアとのパーティ、エクソシストだった頃の
記憶など）

4、以後、挿絵をいれるべきでしょうか

以上の4つです、どうかお答えください！

アンケート！（後書き）

感想の所に、意見をお願いします！

第7夜〜マテール6〜

「私が、エクソシストだって?」

「マジかよ!千年公!」

「エエ?そうデスヨ?レンは、元、エクソシストデス
そんなコトよりジャスデビ??」

クロス討伐のお仕事はドウシマシタ??」

「「おう、直球!」」

どうやら、仕事は失敗したようだ…

デビット(髪が黒い方)が、口を開く

「レンはそのことを知ってたのか?」

「知らないハズデス?教えてませんカラ?」

「そういや、レンって記憶ねえんだよな…」

「どーやって消したんだ千年公」

「彼女のノアの能力を使いまシタ？」

「レンの能力って何だよ」

「全てを無に帰すカデス？それをレンの脳に使って

記憶を消したのデス？」

「「！！」」

「レンの記憶って戻らないの？ヒッ！」

特徴的な喋り方、これはジャステロだ

「戻りませんか？デスが、レンが能力の使い方思い出せば

記憶を取り戻すかも知れませんか？」

デビットは隣にいるジャステロに話しかける

「なあ、ジャステロ」

「？デビット」

「ノアにはイノセンスは毒だよな？」

「うん、そーだよ ヒツ！」

珍しくデビットが考え込む

（おかしくねえか？イノセンスはオレらに毒だろ？

なのに、レンはイノセンスの適合者…

だめだ、意味わかんねえ！）

己が頭脳では理解不能だとわかったデビットは

千年公に聞いた方がいい、思い千年公に聞くことにした

「なあ、千年公」

「何でシヨウ??？」

「レンはノアだよな？」

「ハイ？まごうことナキノアデスヨ？」

「じゃあ、なんでレンがイノセンス

なんかの適合者なんだよ？」

「簡単なことデスヨ？、あの子は、14番目」と同じ

本来存在しないハズのノアだからデス？

イレギュラーにはナニがあるか、わからないでシヨウ?？」

そう、ノアは13名それ以上なんてありえないのだ

「ちなみに、あの子が方舟 ココ に来たノハ

ある『取引』ヲしたからナノデス?」

「『取引』?」

首をかしげ、顔を見合わせるジャステビ

「エエ? 『取引』 デス? あの子がここに来る代わりに

ある人物を元に戻す、とイウ条件で

あの子は、教団とお友達を裏切ってまでココに来たのデスヨ?

わかりマシタ??? 二人共??」

「ああ、大体…」

「ヒッ! ややこしいね!」

「タダ…消去したとイツテモ、彼女の能力を

使いマシタカラネエ…? もしかしたらチヨットした事で

あの子の記憶が戻ってシマウカもしれマセン?

せめて、マテールにエクソシストが居ないとイイのデスガ？」

sideレン

嘘だ…私はノアだ、エクソシストじゃない

でも、この人が嘘を言ってるようには見えない…

3年前…か、記憶にないのに確かめようがないじゃないか

テイキや千年公が、私に嘘つくわけないよね…？

わからない…あの時と同じだ、私がノアになったときと、同じ…

「おい、どうして何も言わない？」

「…私になにが言えるのさ…わかんないから言えないね

いや、わからないじゃなくて、知らない’かな？」

「何が言いたい」

「知らない’ことはどうにもならない

3年前まで、って言ったよね？

悪いけどその時期の記憶は、私にはないんだよ…」

知らないって怖いな…せめてそのときの記憶が私に残ってたらよかったのに…

「記憶がないだと？」

なんか今にも襲ってきそうだね

でもね、知らないモノは知らない

「ないものはない、ってことさ」

「どういことだ」

この人自覚してるの？さっきから同じ事聞してるよ…

「あのさー自覚してるかもしんないけど

さっきから似たような事聞してるよ？」

「知るか」

「オイオイ、そんなのアリかよ…」

ジャスデビだったらキレてんな

ハア…

「メンドクセエ…」

「それは私が言いたいんだけど…でさあイノセンスは？」

気づいたらいないよ…逃げられたなあ

「あいつら逃げやがった！！」

「気づくの遅くない？」

「ああ？」

なんつう殺気…怖いね

「テメエ気づいてたなら言えよ！」

「私の知ったことじゃないね！」

「お前…イノセンス追ってんじゃねエのかよ！」

「追ってるけどそれが何よ！あんたエクソシストでしょ！」

「カンケーねえ！」

「ざけんな！なんで私が！」

「鬨んのかテメエ！」

「上等だ！かかってこいよ！」

「神田殿、落ち着いてください！」

「なんだよ、テメエ！」

……？なんだ？こんなこと前にも……？

ザザッ

頭に何か流れてくる…なんだ…！？これは記憶？！

『ユウ、レン、いつまで続けてんのさ！』

『なんだ、アルマか』』

『なんだ、ってなんだよ！二人共！』

『どうせ怪我しても治るよ？』

『そういつことじゃない！』

『そうだぜ、アルマこんなの10秒もすりゃ治る』

なんだよ、こりゃあ、こんな記憶知らないぜ？

アルマ、ユウ、レン？

誰だ？あれは私か？じゃああの二人は？

あの、片割れの方には見覚えが無くもないような…？

誰かに似てんだよなー誰だっけ…？

あの目つきの悪さは、まさか、まさか！

目の前の長髪のエクソシストか！？

いやいや、ありえねエ！つか、私はアイツと同郷かよ！

「ククツ…アハハハッ！」

「！？」

「あー、なるほどねえ…」

結局、私はエクソシストだった、ってわけか

笑えてくるね…どうりでイノセンスの使い方が

わかるわけだ

？ファインダーの様子がおかしい？固まってる？

「神田殿後ろ…」

アレン・ウォーカー？へえ…考えたねレベル2

（偉いじゃん？よく思いついたね）

（これで、ファインダーは消えます）

(でも、しばらくふりを続けるよ?)

(わかりました、レン様)

ゆらり、アレンもどきが近づいてくる

「さ、左右逆…っ」

へえ、あいつ神田って言うんだ

記憶じゃ、ユウだっけなっただあ 神田ユウか

神田のイノセンスの形状は日本刀?

おっかないね

神田はイノセンスをかまえた

「どつやら とんだ馬鹿のようだな」

馬鹿なのはあんたじゃないの?

ほら、よくみるよ

まあ見る気もないだろうけど

あのアレンがなんかおかしいとは、思わなかったのか?

短気っつーのは直した方がいいんじゃないの

ほら、どっぴんと言ってる間にもアレンもどき

今にも泣きそうじゃん

バン！

なんだ！？

壁から手が生えてる！？いや違う！

あの手はアレン・ウォーカーのイノセンスだ！

あーあ、折角ファインダー消せそうだったのに

何してんの、アレン君？

今にも死にそうな、アレンもどきが

小さくアレンの名を呼ぶ

「ウォ…ウォーカー殿…」

…ハア

とんだお人好しだねアレン・ウォーカー

神田が殺気の籠った声でアレンを呼ぶ

「モヤシ…！」

「神田……」

「どういづつもりだテメエ……！」

「なんでアクマを庇いやがった……！」

「アレンは一瞬怯んだが、臆することなく

言い返す、…茶番だね

「神田、僕にはアクマを見分けられる‘目’があるんです

この人はアクマじゃない！」

「アタリだよ！アレン・ウォーカー！」

「試しにそいつの皮膚取ってみるよ、正体がわかるぜ？」

「ベリッ！」

「アレンはもどきの皮膚を取った

その正体は、ファインダーのトマだ

「トマ……!?」

「何……っ」

「そっちのトマがアクマだ神田……！」

「どうやら、千年公が言った“アクマを見分ける目”

「ホントだったんだな」

そのとき、偽トマの表情が急変する

獲物を見つけた時のアクマの狂気の顔

そして

ドン！

神田を壁の向こうまで殴り飛ばした

「ぐっ」

神田のイノセンスが弾かれ、床に突き刺さる

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ」

「かつ…神田…！」

「悪いけど行かせないよ、アレン」

「うわっ…！」

私は、アレンに炎乱を突き付けた

「悪いけど、行かせないよアレン・ウォーカー…！」

「行かせてもらいます、何があっても！」

「そうかよ、じゃあここで消えろ！アレン

炎乱2陣目灼熱地獄！」

ゴオオオツ！

あたり一面が炎で満たされる

これで、終わりだよ

！？

「うおおおっ！」

「嘘だろ…！なんでまだ生きてるんだよ！」

「破滅ノ爪！」
エッジ・エンテ

「！」

ギヤギヤツ　ギヤンツ！！

ギン！

！

何でいきなり強くなる？

「だから人間は嫌いだ」

「なんでですかッ！」

「お前に言う必要は無いよ」

つう、アレンの頬から血が垂れる

「ま、いいや

そろそろ向こうも終わるっぽいし、こっちも終わろうか

部下に先越されちゃ癪なんぞな

炎乱コンバート転換」

炎乱の形が変化する

槍から徐々に形を変え、剣となった

「なあ、アレン・ウォーカーお前何でそこまで足掻く？」

「…仲間が大事だからですよ…」

「…仲間ねえ

何考えてんだよ私は、こんなのガラじゃねえな

「別に今じゃなくてもいいか…」

行きなよ…アレン・ウォーカー」

ドン！

「なんだ!？」

こりゃあ、血の臭い？まさか、もう終わったのか

早いな

「アレン早くしな!」

何してんのよ、私は!ついにおかしくなったね

とりあえずここはまずいな…崩落寸前じゃねえか

誰かさんはまだ行こうとしねえし、ああクソッ

しょうがない!

ガッ

「へ?」

グワッ

「おらよ!仲間とやらのもとに飛んでいきな!

お仲間死なせたいの?」

千年公に怒られるのは御免だが、すつきりしねえのは

もつと嫌だ！

あーあ、やっちゃった千年公に怒られるな

でもまあ、2だって弱かねえ、充分だろ

（おーい、2？聞いてるー？）

（何でしょうか）

（私帰るから、イノセンス回収よろしくー）

よし、あとは千年公にどう説明しよう…

第7夜〜マテール6〜(後書き)

3000字突破!

第8夜〜帰宅〜

「ただいまー」

はあ、疲れたと呟きながらレンはいつも通りに帰ってくる

「なあ、ロード千年公居る？」

「いるよお〜おーい千年公レンが帰ってきたよお」

すると何故かエプロンを着た千年公を見つけた

「ヤット帰ってきましたタネ？お仕事はどうデシタ？？」

「スンマセン…失敗しました」

「珍しいねえ〜レン、なんかあったのお〜？」

レンが任務を失敗するのは珍しいらしく、千年公もロードも驚いている

「…ちょっとね」

そう答えるレンは心なしかげっそりしているようだった

「レン、大丈夫う〜？」

「うん、平気平気」

そういつて、ロードにレンは笑いかけた

だが、いつものレンの笑顔とは違いどこか悲しげだった

「ホントに大丈夫デスカ?？」

「ホントに大丈夫だよ…」

言っている本人が気づいているかはわからないが

レンの足どりはふらふらとして正直なトコロ、説得力はゼロに等しい

「やば、忘れてた」

そうつぶやいてレンは鞆を漁り始めた

そして、鞆の中に入っていた袋を出した

「ロード、ハイお土産ー」

レンはロードに袋を渡した

その袋の中には、飴やチョコレートなどロードが好きそうなモノが沢山入っていた

「わお、サンキューレン　おいしそお〜」

嬉しそうにロードは受け取った

そして、早速中に入っていたお菓子を食べている

「ハイ、千年公の分」

レンが千年公に渡したのは千年公に良く似合っただろうシルクハットだ

それは、少しメルヘンチックで店長によると

「これはきつと似合っお客様さんいないよー」

とのことだ

だが、それでも似合ってしまったのが我らが千年公

……………想像以上に似合っていた

そして、千年公は気に入ったのか踊り始めた

レンは鞆を漁っているときにあることに気づく

「……………土産の数が足りない」

確かに彼女の目の前にある土産の数は、千年公とロードの分を抜いても

9個しかないのだ、レンはどの土産が誰にあげるものかを確認する

まず、同じモノが入った袋が二つ、これはジャスデビの二人

「ティキの土産買ってない…」

「きゃははははは！」

大笑いするロード、だがレンと千年公は苦笑いだ

「どーしよ、千年公」

「ナゼ、我輩に振るのデスカ??」

「…何となく…?」

ロードはまだ笑っている、レンはもしかしたら鞆にはいつてるかも!という

小さすぎる望みを胸にまた鞆を漁りだす

レンは武器が大量に入った鞆を逆さにして鞆の中身を漁る

一人じゃ面倒だと思ったレンはようやく笑い終えたロードを呼ぶ

「おーい、ロード、ちょっと手伝って」

「いいよ、何すればいいのお?」

「ティキのお土産さがし」

数分後……

「無いねえ」

「やっぱり買ってなかったかな」

「あのオーレン、ロード？」

「「何ー千年公お」」

「ハンバーグづくり手伝ってくれマスカ??」

「ねえ千年公もしかして今日の夕食ハンバーグ？」

「エエ? そうデスヨ?」

「もう、一週間はハンバーグ続い…ムガツ」

ロードがレンの口を押さえた

「それ言っちゃダメエ」

不思議そうに千年公が聞く

「どうかシマシタカ??」

「ふぁんれもねいれふ(なんでもないです)

フォー口ふあなして(ロード放して)

「いいよお」

ロードはレンから手を離れた

「はあ…」

「そういえばレン…」

「何？ロード」

「前から思ってたんだけど、レンっていつもそのペンダントつけてるよねえ」

「…！ああ、コレ？」

そう言っつて、レンは首にかけているペンダントを見せる

これは、レンが記憶を失う前に神田から受け取ったものだ

… 本人はそれを知らないが

「うん、それだよいつつも着けてるからなんでかなあ…って」

「うーん、なんとなく？なんか着けておいた方がいい気がするさ」

ガサゴソ

「レン…何してんのぉ？」

「鞆漁ってる」

「ティッキーのはないんでしょあ」

「うん、もう諦めたよーちょっと探し物」

「ボクも手伝うよぉ」

「ありがとう」

その微笑ましい光景を千年公は見守っていた

（やっぱりハンバーグは我輩が作るとシマシヨウ？）

そして、その日の夕食で、約レ一名が倒れたとかなんとか

第9夜 夢

…ここは？どこだ？

私確か千年公特製ハンバーグ食べて…あれ？どうなったんだっけ？

ああそつだ私、倒れたんだ

…思いだしたら気分悪くなってきた…

！…そついえばここどこ？

私が知らないところ、それだけは分かる

でもここ嫌に懐かしいんだよな

あの壁のローズクロス…黒の教団が

意外とでかいんだな…

迷うちまうよこんなに広がったら、いつか餓死者がでるよ

ハア…この際だ、探検していくかね

確か教団つて塔みたいになってるんだよな

！声が聞こえる…？

どこから…？

もしかして、これって私の記憶か？

それなら足が浮いた感じのわけが納得できる

『放せリナリー！』

『だめっ！放したらレン、また喧嘩するでしょ！』

『コムイテメツ放しやがれ！』

『放したら君レンちゃんと喧嘩するだろう！』

『『いいから放せ！』』

『『絶対イヤだ！』』

何してんだ？すごい声でかいけど…

つかまってんのって、あれ私？…それにあの長髪…

マテールの時の…！…！

……それよりなんで捕まってるんだらう

『リナリー放せ！』

あの二つ結びの子、リナリーって言うんだってことは

神田を押さえてるのはリナリーの兄さん？

顔似てるし多分あってるよね

『コムイ放せよテメエ…!!』

へエリナリーの兄さんの名前はコムイか…

つか、夢でも怖いね 迫力一緒！

やけに生々しい…

で、なんで喧嘩してんのこの人たちは…

いや、私には関係ない

！？場所が変わった？

今度はどこだ！？わかんねえ！

『誰か起きてる人いるー?!』

『アルマ、いねエと思っぜ』

このチビ達って、あの時見た記憶の

！

でもここは？なんか沢山水が…

！？水の中に人がいる！

ちやぷん…

今度は何だよ！！？

『ねえユウ聞こえた?!』

『ああ、誰か起きてんな』

アルマとユウは音がした方に行く…

見ておいた方がいいのか？

『ユウ！やっぱり起きてる!』

『誰だ!?!』

『えっとここは、“ren”の水槽だよ!』

『ホントに起きてるのか？アルマ』

ren!?!今そう言ったかアイツ!

レンは水槽にかけよる

こいつは…

私だ!

「うあああつ！」

ハアツ、ハアなんだつたんだ今のは！

私の記憶だよな？鮮明に覚えてる

いや、思い出した！

夢で見たトコだけ、でも、何も知らないよりマシだ

落ち着け、落ち着け！

深呼吸をして、とりあえず落ち着いた

ここは、私の部屋？

誰が運んできて　　？

「うおっレン！起きてたのかよ」

「デビット？なんでここに居んの？」

「っーか、お前うなされてたぜ？平気かよ？」

心配そうな表情のデビット、珍しいねこんな顔もするんだ

「平気、ジャスデロは？」

「ああ、ジャスデロは多分本読んでるぜ」

そういうデビットの手には“もう大丈夫借金返済法！”があった

「ねえ、デビット」

「なんだよ」

「クロスからの借金そんなに多いの？」

ギクツ、デビットが動かなくなる

なんだ、借金減ってないんだ…もしかして増えたのかも…

なんかここまで来るとクロスって凄いね、普通敵に借金ツケないよ

「おーいデビット？大丈夫？」

ハッ、とデビットは我に返る

「あ、ああ大丈夫だ…」

言葉に元気が無いんですけど、ホントに大丈夫かな？

話題を変えよう、借金の話だとドンドン沈んじゃうよ

「ねえデビット今何時？」

「確か…10時半頃じゃねえか？」

「もしかして夜？」

「そうだけ」

だから、眠いだね…なる

「デビット今からどうすんの？」

「書庫だ、本読みに」

「私も一緒に行つて良い？」

「ああ！」

よし、もとに戻つた！

レッツ書庫！

そういえば、デビットに土産あげてないかも…

「デビットちょっと待っててー」

「おっ」

えっと、確かこの辺に……あつた！

「デビットー！」

私はデビットに土産を投げた！だってそのほうが楽しよ？

「うおっ！なんだよコレ…！」

「土産です、昨日だけ一昨日だけにマテール行ってたからさ」

「サンキュ！」

「うん！」

ズルズル…

「お前何引きづつてんだよ…！」

「うん？ああコレ？ジャステロの分の土産 デビットのと同じのが入ってるの」

引きづつちやマズイかな？

「マズイと思うぜ？」

どうこうしてる間に書庫到着

いやー短かったねー

「ねえデビット、話し声が聞こえない？」

「誰かいんじゃないの？」

確かに、聞き覚えのある声が二つ程…

ジャステロの声は分かる、だがもう一人の方は女の声だということ以外分らない

「おいジャステロー！」

「ジャステロ、呼んでるよぉ」

「何？ヒツ！」

「あつ、ロード！何してんの？」

「ジャステロとおしゃべりしてたんだよぉ」

「あつ、そうだった！ジャステロ！土産っ！」

ブンっ

デビットと同じように投げて渡す

ゴンッ！

鈍い音が響く、どうやらレンが投げた土産を取り損ね、頭に当たってしまったらしい

「ジャステロー！！」「」

3人の絶叫が響いた…

第9夜〜夢〜（後書き）

番外的な…

第10夜〜クロス討伐〜

「レン起きてるかー？」

今は朝7時頃、普段のレンならまだ安眠中だというのがデビットがレンを呼びに来た

「起きてるよ〜ちょっと待って！」

「おう」

実は二人共睡魔に負けそうなのだ

ジャスデロはともかく、デビットやレンは普段こんなに早く起きない

レンに至っては昼過ぎまでは普通に寝ている

酷い時には丸一日寝ているのだから、

レンにとっては今すぐにも眠ってしまいたいのだ

だが、人を待たせる訳にはいかない

だから今ちやつちやつと身支度を済ませていると、いうわけだ

服も着替え終わり、全ての身支度を済ますと

廊下にいるデビットに声をかける

「終わったから出るよー」

「ああ」

レンが廊下で待っている人物には必ず声をかけるようにしている

なぜなら、数か月前ティキが任務だから、

とってレンの部屋の前で待っていたときに気づかずにドアを開け

気絶させてしまったことがあったからだ

それが軽くトラウマにでもなっているのだろう、

ドアを開けるのが遅くなっている

カチャ…

「デビットおはよー」

「おはよー…」

「……………ジャステロは？」

「まだ寝てるんじゃないか？」

「起こしに行く？」

「そうだな、そうするか…千年公に怒られんのはオレらだもんな」
「うん」

「で、ジャスデロってどこにいんの？」

「部屋にいなかったからな…書庫にいるかもしんねーな」

「書庫？またどうしてそんなところで」

「知るかよ、本読みに行ったんじゃねーの？」

「……眠い……」

「言うなレン…オレまで眠くなるじゃねーか……」

どうやら二人共睡魔に襲われているらしい

「デビッド…？」

「んだよ……」

「あんたらってさ、なんでいつつもメイクしてんの？」

「ほっとけよ」

「じゃ、じゃせ」

(うしろのかよ……)

「書庫着いたよ」

「おい、ジャステロ？寝てんのか？」

応答はないだが、その代わりに寝息のような音が聞こえる

「「オイ！！ジャステロ！起きろ！！」」

互いの声で頭が痛い、ちょうどいい眠気覚ましだ

「デビット？レン？デロに何か用ヒツ！」

「今日は千年公に呼ばれてたろ？まさか忘れてたのか？」

「……………」

どっちら忘れていたらしい首をかしげている

「さてと、千年公のどこいこーよ ジャステロ」

「さて？3人とも揃いましたネ？」

君たち3人にお仕事デス？」

「仕事って何すればいいの？千年公」

レンが問う、すると千年公はジャスデビにとって最悪な仕事を言
い渡す

「クロス・マリ안의討伐デス？今度は3人で行ってください？」

第10夜「クロス討伐」(後書き)

ただいま原作3刊目ぐらいです

アンケートにも答えてください

第11夜〜任務〜

「へっ?」

「どーゆうことだよ!千年公!クロスはオレらの標的だろ!」

「ヒツ、そーだよ千年公!」

先程言い渡された仕事、クロス・マリアン討伐だがレンはともかく

ジャスデビの二人は絶賛反論中である

「キミ達、イツモ失敗しているノニ良くそんなことが言えますネ
エ?」

そう、ジャスデビの二人と言えばクロスを見つける度に借金をつけられる

かわいいそうな双子だ

それはともかく、先程からレンの頭には?マークが浮かんでいる

「ねえ、千年公クロスってアレン・ウォーカーの師匠だっけ?」

「そうデスヨ、レン?」

千年公がそう言っている間にもジャスデビは反論を続ける

「おい、千年公！クロスはオレらが捕まえるってんだ！」

「…お黙りナサイ！？デビット??？」

笑っているが、千年公はどうやら怒っているようだ

殺気が痛い……

「…！…スンマセン」

先程から考え込んでいたレンがようやく口を開く

「わかったよ、千年公。その“仕事”受けるよ

私にもその方が

都合がいい」

「おいレン！お前」

すかさずデビットが反論する

「え〜いいじゃん、別に決めるのは私でしょ？」

なあ、千年公?」

そう言っつてレンは悪戯っぽい笑顔を見せる

これでは、デビットも反論できない

「そうデスネエ？デハ、レン頼みマシタヨ？」

「はいなあ！…で、何で行くのさ？」

「ゲートを出したくテモ、クロスはどこにイルのか

分かりませんかからねエ…？」

頑張って探シテクダサイ？」

頑張って探せ、ということとは

「もしかして、徒歩？」

「そうなりマスネエ？」

「……はい」

「じゃ、さっさと行こーぜ レン」

「うん！」

「目指すは、^{チャイナ}中国だぜ！」

そして3人は中国へ向かうこととなった

第11夜〜任務〜（後書き）

いろいろ頑張りますので、冬休みまでお待ちください！！

第12夜〜謎〜

チャイナ
in 中国

バアン!

「居るかクロスーリーツ!」

「やっと見つけたもんね!クロス、ヒツ!」

「扉ドアぐらいフツに開けようよ…何も壊さなくてもいいのに」

上から、デビット、ジャスデロ、レンの順だ

その時、デビットはベットの上に何かを見つける

「なんだありゃ?」

「何か見つけたの?」

デビットは、ベットに置かれてあったモノを手取る

「メモ?」

「だね、ヒツ!」

「なにになに…『カメの爪亭にて待つ　byクロス』…」

「なんか嫌な予感…」

「よっしゃあ！行くぞレン、ジャステロ！」

「デビットストップ！待って！！」

レンはデビットの襟をつかむ

「なんだよ、レン」

「何か思いついたの？ヒッ」

「あんたら、今までコレで借金着けられたんじゃないの？」

ギクリ、ジャステビは顔を青くする

「やっぱり、あんたら単純だね」

アハハと、楽しそうにレンは笑った

それは人の暖かな笑顔で、ジャステビが千年公の仲間になる前には全く向けられなかったものだった

レンの笑顔で気が抜けたジャステビはつられて一緒に笑った

「で、どうしよっか？ジャステビ？」

笑顔でレンは言った

その質問の返答は意外なものだった

「とりあえず、行こーぜ！」

もしかしたらいるカモだろ！」

「クロス、ぶっ殺す！ヒツ！」

「さっさと行くぜ！レン！」

（行くんだ…また借金増えるんじゃない？）

何故かはりきるジャスデビ、それに対してレンは諦めた表情だ

（ま、行ってから考えよう）

「うん！」

数分後：カメの爪亭前にて

「やっと見つかったね」

数分間全力で走り続けたというのに、レンは全く息切れしていない
むしろ、元気になっているようにも見える

だが、ジャスデビは肩で息をしながらかなり苦しそうだ

「ハッ…ハアッやっ…見つけたぜクロスの野郎…！…ゲホッ！
ゼエ…」

「ヒッ！…クロスめ…やっと思つめたよ！ヒッ…ゴホッ！」

二人共言葉が途切れ途切れで、何を言っているのか

結構聞き取りにくい

「ゼエ…ハア…」

「ジャスデビ？大丈夫？」

疲れた表情なんて一切無しに、心配そうにレンは聞いた

「…全然…平気だぜ…」

「大丈夫だよ…ヒッ！…」

「…いやいやいや、平気じゃないでしょ！？」

二人共、どっかで休まないと…」

そう言うっては見るが、ここには休めそうな場所なんて見当たらない

しばらくレンは考え込み、不意に顔をあげると

これなら平気だ、と呟くとジャステビに向き直った

「じゃ、私が“カメの爪亭”行ってクロスの奴が

居るか確かめてくるから、ココで休んどいてー」

言うや否や、レンは“カメの爪亭”へ走って行った

「すいませーん、誰かいますー？」

“カメの爪亭”の前でレンはこの奥に居るであろう

店の店主に声をかける

すると、奥の方から声が帰ってくる

「いますよ、どうぞ中へ」

その返答に甘え、レンは“カメの爪亭”へと入った

「いらっしやい……」

店の内装はいかにも、といった風のもので、

レンのような年の者が入るところには到底思えない

そしてレンは、店主を見つけると

いきなり問う

「すいませんが、此処に赤毛の異国の男がきませんでしたか？

私、その人を探しているんです！」

「ああ、その人なら“カメの爪^{ウチ}亭”にツケてった

人だな…確かこんな感じの二人組が返済に来る、とか

いったよ」

そして、店主はレンにクロスが描いたであろうメモを見せる

(……これってジャスデビじゃん！)

驚いたレンは店主に今までの経緯を嘘を混ぜて話す

「
というわけなんです……」

すると、店主は目に涙を溜めて、レンに言う

「仕方がない…！アンタに免じてあの人の借金は

チャラにしてあげるよ！」

「本当ですか！？ありがとうございます…！」

一体、レンは何を言ったのだろうか…

強面の店主が、大勢 目に涙を溜め、うんうんとうなずいている

数分後…無事に帰って来たレンを見て

ジャスデビはレンに対して謎が増えたという…

第12夜〜謎〜(後書き)

まだまだ続きますよ！

明日から冬休みですから！

第13夜 悲劇 (前書き)

なんちゃってタイトルです
その訳は読んでからのお楽しみ

第13夜 悲劇

「うん…」

今は早朝、朝日が優しく照らすなか

世界地図を見つめながら窓辺で風斬レンは頭を悩ませていた

「クロスの奴、何の情報も残さねえとは、恐れ入ったね…」

そう、中国での一件の後クロスについて探しまわったが

これという情報も残さないために、クロス捕獲は一時停止中なのだ

ちなみに今は、宿を借りている

(クソ、何も思い浮かばねえ…どうすっかな)

千年公にや怖くて言えねーし、ティキに聞くのはちょっと…アイ
ツ馬鹿だしね…

そうだ！ロードに聞けば…イヤだめだ

あいつじゃ千年公にバラしちゃうだろうしー)

ハア、と溜息をつく

「レン、お前まだ、んなことしてんのか？」

レンは振り向く、ジャスデビのどちらかを確かめるためだ

「なんだ、デビットかジャスデロは？」

「まだ寝てるぜ　っーか眠みィ……」

眠そうに欠伸をする

「まだ寝てていいよ？」

何で起きたの？、と言いたげな目でレンはデビットを見る

「いいじゃねえか、たまには早起きしても」

「……何が早起きだか」

ボソリとレンが呟く

ドサッ！

「「あ？」」

音がしたのは、先程までデビットが寝ていた部屋

もっと簡単に言うと、現在ジャスデロが寝ている部屋だ

「おーい、デビット？今の音ナニ？」

「ジャスデロがベットから落ちたとかじゃね？」

「あんたら、18歳でしょ？普通落ちないって」

「……だな」

「確かめに行く？」

「行くか」

二人はジャステロが寝ている部屋まで急ぐ

そして、部屋の前に着く

「開けて平気だよな……」

「平気だと思うけど……まさかベットから落ちてたりしてないよね」

「知るか……行くぞ」

ガチャ

デビットが扉ドアを思い切り開けた

すると、レンとデビットが想像していた最悪の出来事……が起きていた

「うわー、案の定……」

「オイ、ジャステロ……ウソだろ……」

二人が想像した最悪の出来事、それはジャステロの

ベットからの転落だ…

だが、驚くべきはそれだけではないのだ

それは、ベットから転落しようが、熟睡しているジャステロの根性である

二人は呆れたような表情で顔を見合わせ笑った

ジャステロが起きたのは、それから約2時間後だという

第13夜〜悲劇〜（後書き）

どうでしたか？タイトルの理由がなんでそうなったか
お分かりになられたでしょうか

わかった方は、感想の所にお書きください

正解か否か、答え合わせをさせていただきますので！！

ついでに皆さんにお願いがあります！

かなり前ですがお願いしたアンケート、誰でも受けられるので
せめて一度アンケートを受けてください！

そして、お気に入り登録をしていてくれる読者のみなさん！
いつかお礼は小説でさせていただきます！

どうぞ、次の話をお楽しみに！

第14夜 行先

「ああーッッッッ！」

突然大声をあげたレン、その声にジャステビは二人共顔をしかめている

「ンだよレン、いきなりデケエ声出しやがって」

耳を塞ぎながらデビットがレンに問う

「分かったんだよ、あのクソ元帥の居場所が！」

地図に顔を向けながらデビットの問いに答えるレン

彼女の手は地図の上に何か図を書いては消し、書いては消し、

を延々と繰り返していたが

問いに答え終わると、その手は止まる

「いいから、見てよ二人共！」

笑って二人を呼ぶレン

そして、二人が地図を見ていることを確認すると

レンは誰にでもわかるような超絶簡単な説明をする

「
って訳だけど…わかったよね？ジャスデ
ビ」

「ああ、わかったぜ」

「デロもわかったよ〜ヒッ！」

レンはホツとした表情を浮かべた

ジャスデビが理解できるのか、よほど不安だったのだろう

「あー良かった、もしかしたらダメかと…」

レンが安堵の溜息をもらすと、デビットが得意そうに「こつ言った

「テイキと同じだと思うんじゃないねー」

「して、ジャスデビ？理解できたんなら言えるよね？」

次の行先はドコでしょうか？」

「「ロシアだぜ！」」

「ピンポーン！じゃ、行こーか！」

「「おつよー！」「」

第14夜〜行先〜（後書き）

今回ののはかなり短く収まってしまいました

ジャステロのキャラが良く分からないんですよ…泣

誰か私に救いの手を！！

第15夜〜汽車にて〜

ガタン　ゴトン　ガタン　ゴトン　……

規則正しい音に揺られ、現在レンとジャステビの3名は

ロシア行きの蒸気機関車に乗っている

レンに至っては汽車に乗るや否や、数日間の徹夜の疲れが出たの
だろうか

倒れてしまい、デビットに抱き抱えられて乗車したのだ

だが幸い、今日の時間帯は乗車人数が少なかったので赤っ恥をあ
まり晒さずに済んだが

普段の駅なら、どうなっていたのかわからない……

いや、きつと汽車に乗るのも苦痛になってしまつところだっただ
らう

座りながらデビットは溜息をつく

「なあ、ジャステロ」

デビットは隣に座っているジャステロに声をかけた

「デビット？どつしたの　ヒッ！」

「……イヤ、なんでもねエ」

やっぱりイヤ、そう言わんばかりのデビットの表情

普段なら、レンがいつも二人に話しかけ楽しくその場を盛り上げるのだが

今は寝ているためどうにもならない

しばらくその場を沈黙が支配する

(レンが起きりゃ、楽しいんだけどな……)

何考えてんだよ、オレ……疲れてんのか？まさかな……)

ジャスデロは、外の鳥を観察し、レンは気絶……

デビットにとってこれ以上退屈なことはないだろう

(オレも寝るか……することねえし……)

数時間後……

「…………ん」

デビットが目を開く、だがレンはまだ寝ていて
起こすわけにもいかない

ジャスデロは？、こちら先程と同じように外の鳥を観察している
すると、汽車の中にアナウンスが聞こえてきた

只今、ロシアで御座います、お降りになられる方は足元に
充分お気をつけください

どうやら、ロシアへ無事に到着したようだ

デビットはレンを起こそうとするが、なんだかバツがわるい
しばらく考えた結果、抱き抱えて下車することとなった

（仕方ねえ…）

ヒョイとレンを抱き抱える、すると何かがおかしいと、そうデビ
ットは思った

（軽っ…！いくら女でも身長はオレら近いんだぜ？

こんな軽いワケ…）

瞬間、デビットは千年公が言っていたことを思い出す

『レンちゃんは、おかしいデスヨ…？』

なにか八我輩にもワカリマセンが、あの子八何かを拒絶し続けて
イル？

おそらく、ソレデ、レンちゃんは時々体力^{エネルギー}切れを起こして

たおれてしまうのデシヨウ？』

(………何かって何だよ千年公)

「おい、ジャステロ！そろそろ出るぞ！」

「了解！ヒッ！」

ようやく、3人はクロスがいるカモ知れない

ロシアに辿り着いたのである

………約一名気絶したままだが

第15夜 汽車にて (後書き)

みなさん御休みなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570z/>

THE LAST MEMORY ~ 第0使徒風斬レン ~

2011年12月23日00時51分発行